

道を極めるには年数がかかります。

佐藤 康二さん
(美原町在住)

背ひれが無く、頭に肉が盛り上がり、泳ぎが下手な金魚「ランチュウ」。しかし、金魚の王様といわれるその姿に魅せられ、「ランチュウ」になる方も少なくありません。今回は、そのうちの1人、佐藤さんを紹介しよう。

佐藤さんは、ランチュウに魅せられて30年。もともと趣味ではじめた飼育でしたが、今は本格的な飼育へと変わりました。特に、昨年度年退職された後は、自他ともに認めるランチュウ一筋の生活ぶりです。「昨年までは癒しの対象でした。しかし、今は品評会への挑戦に変わりました」と力の入れようは半端なものではありません。毎年、品評会に向け本格的に飼育がはじまるのは産卵時の4月1〜2万粒の卵が産まれ、4〜5日で稚魚になります。その後、良い魚を残すため、千匹、500匹、100匹と間引きします。そして大会が開かれる秋には、良い魚を数匹残せるかどうかの厳しい世界で、飼育家の腕の見せ所です。

1番の繁忙期は7〜8月。1日に6回もエサを与えるため、朝4時からエサやりがはじまります。これに比例し、水質が悪化するのも早いので、頻りに水替えを行います。



ご自慢のランチュウと水槽

「なんとか全国大会の上位に入りたい。願わくば茶冠をつかみたい」と良いランチュウを育て、その道を極めることに熱い思いをみせながら佐藤さんです。

はっぴーとこ 野老っ子



▲並木保育園園児たちが七夕飾りに参加。大きな夢と願いを込めた短冊を飾りました！
6月30日(月)〜7月8日(火) 市役所1階・市民ホール

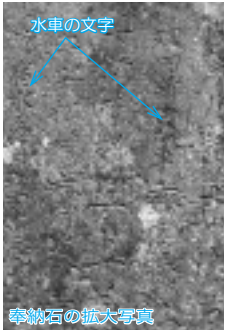
みんなの 広場

TOKOROZAWA 水車屋のはなし

本郷・水車屋のはなし

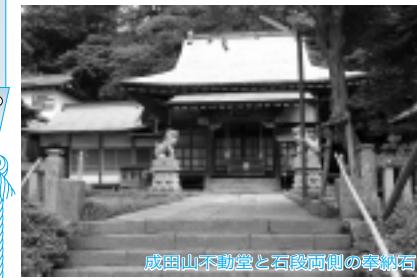
では昭和のはじめくらいまで、水車の光景が見られたといえます。水車は、灌漑用に設けられたものと、用水や自然の川の流れる動力に利用し、臼や杵を結び付けて製粉や精米するものがあります。市域を含む武蔵野地方では、主として麦の製粉や精白をする水車業が江戸時代から盛んでした。大正時代には電気が普及するなどして急速に衰退していきしましたが、それまでは周辺地域だけでなく、江戸・東京に向けて営業する水車屋も少なくありませんでした。

ところで、本郷の東福寺には水車屋の名前が刻まれた奉納石があります。本堂東側の成田山不動堂



奉納石の拡大写真

屋号で、「車屋」といって、たいいてい、かつて水車をしていたことからきていますが、市内には今でもそう呼ばれている家があります。市域



成田山不動堂と石段高欄の奉納石

前にある石段の袖石がそれです。成田山不動堂は、明治9年(1876)に現在の場所に建てられました。玉垣などには近在の商人の名前が多くみられますが、商売繁盛の信仰を集めていたのようです。

石段の袖石は、ちょうどお堂が建てられたときに奉納されたものです。この奉納石は、本郷の人たちが発起人になり、ほかに近隣の発起人の一人になっています。今でも屋号を車屋といっているのは、残念ながら水車や水車小屋の痕跡を残した場所が残っていません。わずかに、本流から導水した「まわし堀」と呼ばれる堀跡が坂の下地区に残されているだけです。

一昨年、所沢市農業協同組合(現JAいるま野)で実施した調査によれば、市内には昭和のはじめに少なくとも16か所の水車があったことが確認されています。

東福寺の奉納石を見るとき、当時の水車屋の存在とその勢いを感じることが出来ます。

水車屋や水車業を営んでいた24人が名前を連ねています。それらは現在の新座市、清瀬市、東村山市、小平市、所沢市に及んでおり、おそらく野火止用水と柳瀬川で水車業を営んでいた水車屋ではないかと思われる。

本郷にもかつて山下水車という水車屋がありました。その家は、今でも屋号を車屋といっているのは、残念ながら水車や水車小屋の痕跡を残した場所が残っていません。わずかに、本流から導水した「まわし堀」と呼ばれる堀跡が坂の下地区に残されているだけです。

ふれあい館 『エコ回』不用品ガイド

- 譲ります ▶B型ベビーカー▶テレビ▶BS用アンテナ▶スチームアイロン▶ヘッドホンステレオ▶掃除機▶マウンテンバイク(子ども用)▶製図機▶一輪車(16インチ)▶かや▶子機付電話機
- 求めます ▶はた織り機▶大正琴▶パソコン▶ミシン▶組み立て式自転車▶エアコン▶ゴルフセット▶ランドセル(黒)▶自転車▶扇風機▶二層式洗濯機▶ビデオデッキ▶大型ソファ▶パン焼き機

受付方法 電話による先着順で紹介します。
休館日 月曜日、祝休日
申し込み・問い合わせ リサイクル
ふれあい館 ☎994-5374・
FAX994-1118



▲寄贈されたピオトープにメダカなどを放流。みんな元気な元気に育ってね！「学校ピオトープ竣工式」。
7月8日(火) 所沢小学校

街かど スムイン

▶皆さんからの「街かどスムーズイン」情報を募集▶採用者には事前に連絡します▶「誰でもエッセイ」ではテーマにそった投稿を募集▶はがきに300字以内▶文章は添削あり▶掲載者には記念品を進呈▶次のテーマは「買い物」▶新しいお店の開店時には必ず足を運んでしまう▶同じ物を買うのにもつい高値のほうに手を出してしまう等▶皆さんの買い物にまつわる体験談や思い出話をお寄せください▶締め切りは8月13日(木)必着▶住所・氏名・年齢・電話番号を明記▶送り先：〒359-8501・並木1-1-1 所沢市役所秘書広報課「みんなの広場」係



▲総勢208人の選手が参加し、各クラスに分かれ熱戦を繰り広げた「所沢市高齢者囲碁・将棋大会」。
6月26日(木) 市役所8階・大会議室

町内会 めぐり

【小手指地区・上新井一丁目町会】 ~みんなで建てました~



リサイクル活動に励む皆さん

私たちの町会は、小手指駅北口から東に徒歩5分。西武池袋線と国道463号の間に広がる、会員700世帯の町会です。その線路沿いに、白くかわいいうちの2階建の上新井一丁目町会集会所「すみれ会館」があります。

「どうしたら集会所を建設することができるか？」ゼロからの出発でした。資金は？補助金申請は？設計は？と役員全員が会議、会議の毎日でした。

その中で「資源回収リサイクル活動をすれば、会員へのアピールと建設資金積立の二鳥一石にならないか」との意見が出され、リサイクル活動が始まりました。平成11年7月から、月2回をリサイクルの日とし、雨の日も雪の日も続けてきました。

平成13年6月には、こうしたリサイクル活動が認められ、市と環境推進員連絡協議会から表彰状をいただくこと

ができました。集会所建設と土地購入のために始めたリサイクルでしたが、資源がいかに大切であるかを痛感しています。また、リサイクル活動を通じて会員相互の共同意識の高揚につながったと確信しています。今では、新聞・雑誌・アルミ缶などを見ると、不思議なくらい体が先に動きだします。

「すみれ会館」は、まさに会員全員の協力で資源回収で建てた集会所です。今後も、長生会・子ども会・町会活動等に大いに利用し、地域活動の輪を広げていきたいと考えています。

「物」の「す」す

一期一会 若狭・近藤 三七雄

青春時代40年前、私は東北山歩き旅行をした。歩いた山は21か所。その中に、こんな体験がある。

それは、月山を下山中のことだった。突然、背後から「生まれ！」の声。振り向くと、二二二二した老夫婦が、「お兄ちゃん、ふらふらよ。休むこともしないと倒れるよ」の忠告。

それが縁で、私はその日、老夫婦の家に招かれ泊まった。天国だった。ところが、闇に目覚めて地獄を知った。闇からこんな囁きが漏れてきたからである。「うちのじいさま、今度はあんな人を拾ってきたのよ。そう、あなたも大変ね。」翌日、羽黒山へ行った。長い石段を休み休み登っていると、誰かが「六根清浄」と叫んだ。振り向くと、あの老夫婦が笑

思い出の旅をもう一度

忙しい日々を追われ、旅もままならず人生も50半ば……。

若いころ、旅が好きだった友人と私。時刻表と旅行案内を手に、コーヒーを飲みながらスケジュールを作るのが一番の楽しみでもあり、旅のイメージを大きく膨らませ、旅をしたものです。

同じように年を重ねている友と、もう一度若き日に旅した地を歩いてみたい。

往復700kmの旅

我が家では、ここ5年ほど6月に山形へ、「さくらんぼ狩り」に出かけている。長女夫婦が仙台に転勤してからのことである。私たちが夫婦は、所沢から仙台まで車を走らせ、数日前から娘の家に泊まるさくらんぼ狩りの場所は、天童市。山寺の近くの農園で、仙台から高道道路を利用して行く。孫2人を含め6人、ワイワイと週末でも混雑しない農園で、甘い佐藤錦を食べる。帰路は温泉。秋保温泉で日帰り入浴をし、食事をする。

所沢から仙台までの往復700kmの運転は、古希を過ぎた今、大変疲れるが、孫たちの笑顔を見られるので、楽しい旅であることは間違いない。

孫の訪問

東狭山ヶ丘・伊藤 平八

孫たちは船橋に住んでおり、今年の4月で小学5年生と3年生になった。

今年の春休みのことだった……。

私が小用先から「ただいま」と帰ると、元気な声で「お帰りの声」と聞き覚えのある子どもの声とともに、トタトタと足音を立てて玄関に迎えにきたのは2人の孫である。

「あ、来たのかい。お母さんと一緒に来たか」と聞くと、「うん、お兄ちゃん」と来たんだ。と誇らしげに、にんまりとして傍らに立つ孫の姿。「そうか、そうか」と玄関を上りながら、2人の肩をそっと触って居間に入った。

孫たちの楽しそうな様子を見ながら、2人だけで実家を訪ねてくれるようになった成長振りに、思わず心の内に熱いものがこみ上げてきた。

命の洗濯

松郷・米山 美紗子

旅の目的というか、価値観やこだわりは、人によって違うのかもしれない。私の場合は、「心を癒すこと」が一番の条件です。

海なし県に生まれ育った私は、小学6年生の臨海学校まで海というものを見たことがありませんでした。おそらく、そのときの感動が私の旅の原点になったのでしょう。

独身時代を経て、現在の家族旅行に至るまで、波の音を聞きに行く旅はずっと続いています。

引いていく波に日々の疲れを運んでもらい、満ちてくる波からたくさんのパワーを受け取るのです。

東京巡りの

北野・小谷 末代

4年前の晩秋。知人2人とバスツアーに参加しました。お昼に横浜中華街で食事をした後、メインの東京湾巡り。山下公園のそばから船に乗りました。

海育ちのわりには、船に乗ったことがない私。酔ったら困ると思いましたが、その心配は瞬間に消え去りました。波しびきをあげて走る船のスピードの速いこと。皆、子どもみたいに大喜び。

見渡す限り広い海。ほおに心地よい潮風が吹いて、いつまでもこうしていたい気分でした。海から見る陸地も、また違った景色で、なかなかいいものでした。飛行機が離着陸を繰り返す様子は、動く飛行機が見ているようで……。メルヘンの世界へ迷い込んだのもつかの間。日の出棧橋に着き船を降りました。

もう一度行きたいと思えます。

誰でも エッセイ

テーマ 旅

